

奥日野たたら文化の活用にかかる提言

2016年3月

奥日野たたら文化活用検討委員会

はじめに

鳥取県南西部、日野川上流に沿って存在する奥日野地域は、古来から、砂鉄と木炭で鉄をつくる「たたら製鉄」が営まれていたことで知られています。花崗岩の山が多い奥日野地域は、良質の砂鉄が産出し、まさに鉄づくりにうってつけであったと言えます。

また、鉄づくりは、出雲系神話とかかわりが深いとも言われ、日野川上流の烏髪山（船通山：日南町）に降り立ったスサノオノミコトがヤマタノオロチを退治した際、その尾から草薙の剣が出現した話は、奥日野と古代の鉄（刀剣）づくりの関係性を示唆する手がかりであるとも考えられています。

たたら製鉄の最盛期である江戸から明治時代にかけては、奥日野地域で鉄山師によるたたら場が多数経営されており、地域を代表する一大産業として栄えました。特に日野町根雨においては、たたら製鉄が、現代にも通じるまちづくりの礎となったと言っても過言ではありません。

奥日野、特に日野地域のたたら文化を語るうえで欠かせないキーワードが、「都合山たたら」と「鉄山師近藤家」です。

溪流沿いの山中に突如出現する都合山たたら跡は、東京帝国大学の俵国一博士が調査記録を残したことで知られ、建屋こそ残ってはいないものの、操業時の姿を今に残す希少な産業遺跡として脚光を浴びています。遺跡用地は、平成26年度に町有地化され、新たな地域遺産としての活用が待たれているところです。

都合山をはじめ、数多くのたたら場を経営した近藤家は、大阪に鉄の直販店を開設するなど、卓越した経営手腕で知られる一方、地域の文化・教育振興にも尽力した篤志家としての顔も持ち、物心両面で人々の生活を支えた偉業は、今こそ再評価されるべきと言えるでしょう。

地方創生が全国で叫ばれ、まちづくりの起爆剤として地域独自の取り組みが期待されている現在、私たち委員は、奥日野のたたら文化の活用こそが、地域遺産を活かした再生の一步となることを信じ、協議を重ねてきました。

ここに、町への提言というかたちで意見をまとめました。私たちの思いが、先人の営みを顕彰し、ふるさとの未来をつくりだす原動力となることを願っています。

平成28年3月31日
奥日野たたら文化活用検討委員会

奥日野のたたら文化の活用にかかる提言

1 都合山たたら跡の保存・活用について

【現状と評価】

日野町をはじめとする奥日野地域では、古来から製鉄が盛んに行われ、江戸時代～明治・大正時代にかけて近藤家に代表される鉄山師が経営したたたら製鉄の跡が多数残っているのが、この地域の特徴ともなっている。

特に、日野町中菅の「都合山たたら」は、1898（明治31）年、東京帝国大学の俵国一博士によって詳細な調査が行われ、高殿をはじめ、大鍛冶場などの図面および操業の記録が残されている。都合山たたらは調査の翌年に廃業するが、たたら山内諸施設の跡がほぼ残されており、保存状態の良さから我が国を代表するたたら製鉄遺跡である。2008（平成20）年には発掘調査が行われ、俵博士の記録が検証されているほか、記録にはない製鉄炉の地下構造なども確認された。たたら製鉄の実態が記録と遺構から明らかになっていることから学術的にも非常に貴重な遺跡といえる。

また、上菅から川沿いにたたら跡へと続く古道（たたら街道）は、原料や製品、山内に働く人々の生活物資を運んだ道であった。道は、たたら経営のために整備されており、路肩の石垣や川を横切る橋の橋台石組みなども残る。たたら製鉄の操業跡と、それに続く道を含めた山内景観全体が残る遺跡は全国的にほとんどない。

町は、昨年度、都合山たたら遺跡の土地を購入し、その保護を図っている。今後、遺跡を産業遺産としてどう活用していくかが期待されているところである。

【具体的な保存・活用の方策】

① 文化財登録、指定等による未来への継承

「都合山たたら」は、奥日野のたたら文化を物語る貴重な歴史遺産である。現在は町有地となったことにより遺跡の保護が図られているが、今後の活用にあたって、まずは全国的な認知度を高めることを目的として、「国登録記念物」として顕彰すること。さらに、県・国の文化財に指定されるべき価値を有することから、将来的には指定史跡としてより高いレベルで保存・活用することが望ましい。

また、文化財の専門職員を配置し、我が国のものづくり水準の高さを示す産業遺跡の代表として、周辺のたたら製鉄遺跡や、関連する様々な文化について調査研究し、その評価を高めることで日本遺産、ひいては世界遺産認定

への取り組みも検討すること。

② 遺跡の保護と整備

当面遺跡の保護を進めるために、遺構の損壊を防ぐことが必要である。ため池の決壊防止や堆積土砂対策、地下遺構への影響が懸念される植林木の伐採は早急な課題である。

また、たたら製鉄遺跡の代表としての景観を維持し、活用するためには、樹木の適切な管理と草刈りを計画的に行うことにより、見学しやすい状態を維持することが求められる。

本格的な史跡整備等は将来の課題とするが、今後、次に述べるような積極的な活用を目指すべきであり、そのための環境整備も検討すること。

③ 観光・アクティビティの重要スポットとしての遺跡活用

奥日野のたたら文化を広くアピールするためには、都合山たたらを貴重な文化財としてだけでなく、山歩きを楽しみながら歴史に触れることができる観光スポットとして活用することが望ましい。

【たたら街道の整備】

都合山たたら探訪の集合・出発地点となっている JR 伯備線上菅駅（上菅集落）から都合山たたらまでのルートである「たたら街道」は、古道や橋の遺構が残るほか、「上菅五滝」とも呼ばれる小さな滝がある渓谷である。傾斜も緩く、たたらまで徒歩で片道 50 分と、トレッキングコースとしても適している。しかし、途中には、ぬかるみや石垣・斜面が崩落している箇所があり、川にはガードレール等を利用した仮橋が 8 ヶ所架けられている。トレッキングコースとして活用していくためには、これらの補修・架け替えなどの整備が必要である。なお、整備に当たっては、道や橋の遺構を調査・記録することも重要であり、得られた調査知見を活用に反映させることも求められる。

また、たたらの見学者のトレッキングコース以外の畑地区からのアクセスについても検討していくことが必要。

【遺跡案内・便益施設の整備】

遺跡案内板は、来訪者に遺跡の概要を伝えるうえで大きな役割を果たしている。現在の案内板は、地元有志によって立てられているが、これらの更新時には、適切に来訪者を案内できるよう計画的かつ効果的な設置を進めねばならない。

さらに、都合山たたら跡を整備・活用するにあたっては、その理解に繋がるような解説を加えた案内板の新たな設置も必要となる。

また、現地のトイレ、見学者のための駐車場などの便益施設の整備も必要で

ある。

【遺跡ガイドの活用】

観光客を受け入れるには、たたらや地域に明るいガイドの育成と活動が不可欠である。都合山たたらガイド育成を、地元のガイド団体等と協議し、共同で実施していく必要がある。

2 近藤家を中心とした根雨のまちなみの保存・活用について

【現状と評価】

根雨は、古くは松江と大阪方面を結ぶ出雲街道と山陽方面に抜ける日野往来の分岐点として発展した宿場町である。その面影は、根雨神社社家・梅林家に残る本陣の門などに見ることができる。近代においても交通の要衝として栄え、国・県などの公共機関も集中し、旧雲陽実業銀行根雨支店（昭和4年）・祇園橋（昭和8年）など、日野郡の中心地として栄えた名残が、まちなみのいたるところに今も残っている。

根雨が経済・文化ともに発展していった要因として、忘れてはならないのが近藤家の存在である。鉄山経営により財をなした近藤家は、たたら製鉄による雇用拡大などで地域経済を支える一方、私財を投じて小学校にピアノや理科標本を寄贈するなど、教育・文化の充実に貢献している。また、1940（昭和15）年には、根雨公会堂（現日野町歴史民俗資料館）を建設して根雨町（当時）に寄贈するなど、たたら文化がもたらした近藤家ゆかりの多くの歴史的建造物が、往事の繁栄ぶりを今に伝えている。

このように根雨のまちは、宿場として発展し、たたら製鉄隆盛の恩恵を受けて形成された歴史的なまちなみである。これに大きな打撃を与えたのが2000（平成12）年に発生した鳥取西部地震である。被災を免れたそうした建造物の保存も重要な課題である。

また近年は、たたら歴史を学ぶ拠点としての「たたら楽校」がオープンし、根雨のまちを昭和初期の風情を求めてまち歩きをする観光客も見られるようになったが、トイレや休憩施設、まちあるきガイドなどを受け入れるための準備が十分できているとは言えない。

【具体的な保存・活用の方策】

① 歴史的建造物の調査および保存

近藤家住宅、日野町公舎（旧出店近藤）、日野町歴史民俗資料館（旧根雨公会堂）、銀行、町家、橋などのたたら文化が生んだ歴史的建造物について、必要な調査を行うとともに、特に重要な建物については、国登録有形文化財や町・県・国指定の文化財として積極的な保存・活用と修理を図る必要がある。

併せて、まちなみについてはその保存を視野に入れて、今なお残る根雨の繁栄を支えた近世・近代の歴史的建造物群について総合的な調査を行うことが望ましい。

② たたら文化を活かした根雨まちなかの観光資源の活用

【歴史的建造物の活用】

根雨のまちなみの中心である近藤家住宅については、所有者と密に協議しながら、一般公開も視野に入れた活用策を検討すること。

また、近藤家もたらした「たたら文化」の結晶であり、国登録有形文化財でもある旧根雨公会堂（町歴史民俗資料館）についても近代建築としての再評価を図り、施設としての在り方を再検討すべきである。

まちなみに残る歴史的建造物については、往時の根雨の人々の暮らしを垣間見るような町家の公開や店舗利用、宿泊施設などの滞在施設としての活用も検討する。

【歴史資料の保存と活用】

根雨の町の繁栄を支えたたたら操業の実態を具体的に伝える近藤家文書などの歴史資料の保存と積極的な活用を検討する。

【便益施設・案内板の整備】

現在、根雨に訪れる観光客向けの案内板および公衆トイレ、駐車場は根雨駅周辺に集中しており、近藤家・たたら楽校エリアにはほとんど設置されていない。まち歩きの観光客が気軽に立ち寄れるよう、根雨まちなかの休憩施設やトイレ、案内板、駐車場の整備なども検討する。また、滞在施設への誘導サインも検討する。

【まちあるきガイドの拡充】

町内では、観光ガイドを専門的に行う団体は「奥日野ガイド倶楽部」のみであり、今後たたら文化を観光資源として活用し、観光客数の増加に対応するためには、現在の少ないスタッフでは不十分である。そこで、まち歩きガイド拡充のための研修・育成を図り、都合山たたら跡、滝山公園（幽霊滝の伝説）、黒坂鏡山城跡や金持神社など、町内の他の観光資源とも線あるいは面としてネットワークすることが望ましい。

【たたらを楽しむソフト】

根雨のまちなみの認知度、満足度を上げるため、90年ぶりに復活した「ふいご祭」や「ミニたたら体験」「たたら紙芝居」「そば打ち体験」など、「観る」だけでなく、たたら文化を楽しむソフト面の充実を検討すること。

【他地域のたたら文化との連携】

島根県の鉄の道文化圏振興協議会など、たたらをキーワードにまちづくりを進めている団体と連携し、たたら探訪ルートの開発や関連イベントの情報共有を図ることで、観光客の誘致拡大を進める必要がある。

奥日野たたら文化活用検討委員会 委員名簿

任期 (H27. 6. 1～H28. 5. 31)

氏 名	所 属 等
角 田 徳 幸	島根県立古代出雲歴史博物館 交流・普及課長
中 原 齊	鳥取県埋蔵文化財センター 所長
大 川 泰 広	鳥取県教育委員会事務局文化財課 歴史遺産室 文化財主事
埴 田 淳 一	鳥取県西部総合事務所日野振興センター 日野振興局長
佐々木 幸 人	伯耆国たたら顕彰会 会長
藤 原 洋 一	伯耆国たたら顕彰会 事務局長
小 谷 澄 男	日野町観光協会 会長
杉 本 準 一	日野町文化財保護審議会 委員
田 貝 英 雄	奥日野ガイド倶楽部 会長
小 谷 保 夫	上菅地区地元代表
山 口 秀 樹	日野町副町長
長谷川 弘 信	日野町教育長
12名	
事 務 局	
権 田 正 直	日野町企画政策課長
入 澤 眞 人	日野町企画政策課 主任